

このごろの漱石論 川副国基

昨年の八月に刊行された江藤淳氏の「漱石とその時代」(第一部・第二部で二冊・新潮社)が、秋の灯火親しむべき季節にかけて、ひろく読まれたようである。

江藤氏といえば、まだ慶応の学生だったとき、漱石を新しい視点でとらえた「夏目漱石」(31年、東京ライフ社)を出版して、批評界をおどろかした俊秀である。その後、力編「小林秀雄」(36年、講談社)をあらわし、渡米してプリンストン大学の客員として視野をひろめ、近くは「成熟と喪失」(42年、河出書房新社)という本で、近代産業社会の母と子のありように鋭いメスを入れて戦後の中堅作家の作品を論

ずるなど、独自のいい仕事をつづけてきている。

昭和三十一年の「夏目漱石」以来の江藤氏の進歩が、こんどの「漱石とその時代」にどのように示されているか、大いに期待しながらわたしも読んだ。

漱石の評伝としては小宮豊隆の「夏目漱石」(昭13年、岩波書店)がながく確固不動の権威をもってきた。この豊隆の「夏目漱石」をゆり動かす評伝はこんどはどのようにならぬか。江藤氏は氏の新しい漱石評伝を、漱石という文学者の基盤となり背景となった「時代」を考えることでおこなった。それが「漱石とその時

代」であり、文明批評家としての江藤氏の資質が小宮豊隆の「夏目漱石」とは別の異色ある漱石伝を書かせたことになる。もちろん、江藤氏の評伝は、作家以前の漱石、「吾輩は猫である」を書く前までの、夏目金之助時代の漱石で、いまのところ終っているが、しかし作家漱石として大いに発現する金之助をよくとらえているので、それはそれでいいわけである。

「その時代」と「漱石」とをからみ合わせる方法は江藤氏の場合どうやら伊藤整氏の「日本文壇史」の手法を思わせるところがある。一八六七年うまれの漱石が、一八六八年以後の明治の発展とともに成長していく。明治の、文化史的・文明史的な発展と漱石の精神成長とを、同時多発的なかたちでさまざまな面から考えさせていく。俳友の正岡子規や高浜虚子との交渉をくわしく調べているところなどはいままでの漱石伝に見られない特色であろう。

そこで、読後感をいえば、まさに「面白かった」の一語に尽きるかもしれない。

「面白かった」けれども、これは一種の読みものふうに軽く読み流してゆけることの面白さであって、文学史家としてこれをうけとろうとするときには、そう簡単に「面白かった」ではすみそもないところがあ

る。最近の多くの漱石論で、もっとも関心をもって追求されるところは、近代日本の代表的知識人としての漱石が、犠牲的に、集中的に一身に背負いこまねばならなかったなにか寒む寒むとした暗鬱なもの、あるいはどす黒く不吉なものの正体をつきとめることにあるようだ。江藤氏は、その正体を、嫂の登世という婦人への漱石の道ならぬ恋慕の情ということにおいている。漱石の心情の上に嫂を深く投影させて漱石文学を考えようとするのは江藤氏が始めてではないが、江藤氏は異常な熱心さで、この登世という婦人の出身、経歴をつぶさに洗い出している。漱石の家系の人としてこれほどに詳細に探索された人もないであろう。そこには探偵趣味に似た面白さもあ

る。そして、江藤氏は、漱石文学の暗鬱なもの、この嫂に対する恋慕の気持についてのつらさ、苦しき、申訳のなき、そういうものに胚胎するといふふうに説いていく。登世についてのいろいろな資料の発見、発掘の上からその論は展開されていくけれども、この登世という婦人の問題だけで漱石の文学全体を割りきろうとするのは、これは行きすぎであろう。漱石の、いわゆる不安の文学の源は決して、この嫂の登世という婦人との問題だけという単一なものではなかったであろうと考える。漱石の若い日の恋愛的心情ということでは、わたしなどはやはり井上眼科での娘さんとの間のはなしなどを無視できないような気持である。江藤氏は、漱石の女性への恋慕ということもこれを嫂の登世ひとりへのこととして強引にまとめてしまい、ついでにこの登世への恋慕が、漱石のどす黒い不安の源であると、これもひとつにまとめてしまったかたちであるが、漱石の暗鬱とした気持の原因は、いろいろと複合的なも

のであったらうとわたしなどは考える。それで思い出すのだが、しばらく前に、批評家の丸谷才一氏が、また、漱石が明治二十六年、日清戦争の勃発を見越して、徴兵のがれのために籍を北海道へ移したという事実をとらえて、そのことをもって漱石の暗鬱なもの源だといふふうに強調したことがある。この丸谷説に対しては地元北海道から出ている「北方文芸」で、その同人のひとり、日清戦争ごろの徴兵忌避はまだそのころ罪悪感の深くともなわなかったもので、漱石自身もこのことを、国賊的行為をしたとして良心の呵責を感じるといふほどの形跡を見せていないと論じたが、まさにその通りであろう。

ふだんは勘でものをいう批評家が、時として実証の衣をまともなものをいいたすと、思わずどきりとするところがあるが、文学史家はやはり軽々しくその手に乗ってはいらないと思う。